1）1870年に発刊された“Dr. Wells, the Discoverer of Anaesthesia.”について

“Dr. Wells, the Discoverer of Anaesthesia.” Published in 1870

日本大学松戸歯学部　石橋　肇，落合俊輔，米長悦也，渋谷　鉱

Hajime Ishibashi, Shunsuke Ochiai, Etsuya Yonenaga and Koh Shibutani
Nihon University School of Dentistry at Matsudo

19世紀半ばにおける麻酔法と消毒法の発見は外科手術の飛躍的発展を促した．なかでも麻酔法の発見は患者の阿鼻叫喚が鳴り響いて，さながら地獄の様相を呈していた手術室を平穏で静かな安楽の地と変貌させた．このように人類に幸福をもたらした麻酔法の発見であるが，誰が麻酔法の最初の発見者であるかというプライオリティーを巡って，様々なドラマが繰り広げられたことは人口に膾炙しているところである．

1844年12月11日，アメリカ・コネティカット州の歯科医ウェルズは笑気麻酔下で自らの上顎臼歯を抜歯され，笑気による無痛手術の可能性を確信した．1845年1月にウェルズはボストンで笑気麻酔の公開実験を行うが，後に患者は痛みを感じなかったと証言したにもかかわらず，手術時にうめき声を上げたことから，インチキだと指弾されてしまう．ウェルズの同僚であったモートンはハーバード大学の化学教授であったジャクソンの助言で硫酸エーテルを麻酔薬として応用した．1846年10月16日にマサチューセッツ総合病院でモートンはエーテル麻酔の公開実験を行い，この公開実験以来，全世界に麻酔法が普及した．

これら麻酔の発見に寄与したウェルズ，モートンおよびジャクソンはそれぞれ自分が麻酔の発見者であると主張し，その栄誉を手に入れようと三つ巴の戦いをすることになる．本人およびそれぞれの支持者はその主張するところを出版し，世間にアピールした．ウェルズ自身は1848年1月に自殺をしてしまうが，その代理人や支持者はウェルズこそが麻酔の発見者であると主張し続けていた．

今回，このウェルズの支持者が出版したと思われる“Dr. Wells, the Discoverer of Anaesthesia.”についてその概要を報告する．

本資料は20.9×13.8 cm大，全16ページの小冊子で，共同演者の渋谷が数年前に大井書店から入手したものである．

本資料全体が濃緑色の布クロスで装丁されているが，出版当初からものか否かは不明である．表紙は明るい緑色の色紙で，表紙の裏にはウェルズの肖像画がある．本資料には本資料を古書として販売した業者が作成したと思われるB5サイズの英文の文書が挟まれていた．この文書が本資料の性格を良く表していると思われるので，以下にその文書の和訳を掲載する．

［パンフレット］．Dr. ウェルズ，麻酔の発見者．ハートフォード．ケース，ロックウッド＆ブレイナルド．1870．16ページ．写真からH. B. ホールにより彫られたホレース・ウェルズの肖像画．8vo. 明るい緑色の用紙で包まれている．パンフレット全体は黄褐色のバクラムホルダーで装丁されている．

Fulton & Stanton, Centenn. Surg. Anesth., p. 34.（訳注：以下1946年に出版された“The Cenennial of Surgical Aneshtesia, compiled by Fulton, F. J. and Stanton, M. E. からの引用と思われる．）

この出版社による初版．おそらくJ. A. Grayによりニューヨークで1860年に出版されたパンフレットの再版．誰が麻酔を発見したかという論争は今日まで続いている．このパンフレットはハートフォードの歯科医師ホレース・ウェルズが麻酔の発見者であるという主張を支持している．ウェルズは1844年という早い時期に臨床で何度か笑気を使用した後にハーバードで笑気麻酔の実験を行ったが，実験は失敗した．少なくとも1800年に行われたハンフリー・ディビー卿の実験以来，笑気の麻酔作用については永らく知られていた．臨床的に不安定な笑気による彼の仕事とモートンとジャクソンとの通信以外にウェルズを支持する

ものは少ない．その通信は実際的で系統立ったエーテルの使用によりモートンに花を持たせているようだが．モートンの支持者はヘンリー・ビゲローだった．彼はモートンによる1846年10月に行われたエーテル麻酔の最初のデモンストレーションの目撃者であった．ビゲローに全く偏見がなかったわけではないが，1846年11月18日のBoston Medical and Surgical Journalにこの体験の最初の報告を行っている．彼は1876年のAmerican Journal of the Medical Sciencesにおける麻酔の歴史についての総説でウェルズ，ジャクソンおよびモートンのそれぞれの主張を分析し，エーテルによる確実な外科麻酔を実施したモートンの功績を認めている．クロフォード・ロングや他の人の主張は検証していない．ウェルズは歯科医業をあきらめて，彼の主張を支持して貰うため，フランスへと渡った．彼は1848年1月に自殺した．1868年にボストン・パブリック・ガーデンに建立されたエーテル記念碑が麻酔の発展過程に言及し，個々の発見者に言及していないことは驚くべきことではない．バックラムフォルダーの背表紙に小さな裂け目あり．パンフレット自体の状態はほぼ良好である．実際，保護用の薄葉紙をとおして口絵がわずかに裏写ししている以外，ほぼ新品である．